



# 湖のランスロ

1974年/フランス・イタリア映画

配給：マーメイドフィルム、コピアポア・フィルム/84分

2022 (令和4) 年5月17日鑑賞

テアトル梅田

監督・脚本：ロベール・ブレッソン  
 出演：リュック・シモン/ローラ・デューク・コンドミナス/アンバール・バルザン/ウラディミール・アントレクニオレスク/パトリック・ベルナール

## 👁️👁️ みどころ

“フランスの孤高の映像作家” ロベール・ブレッソンの1970年代の傑作を、『たぶん悪魔が』（77年）に続いて鑑賞。

私は中世の「騎士もの」が大好きだが、本作に見るアルテュス（アーサー）王の“円卓の騎士”たちの任務は？ 騎士ランスロと王妃グニエーヴルとの道ならぬ恋の行方は？

リドリー・スコット監督の『最後の決闘裁判』（21年）の決闘は迫力満点だったが、本作のそれは如何に？



◆ “フランスの孤高の映像作家” ロベール・ブレッソンの1970年代の傑作『たぶん悪魔が』（77年）と『湖のランスロ』（74年）は、両作とも日本では特集上映などを除き劇場未公開だったが、40年以上の時を経てついに日本で公開！

そんな“触れ込み”を受けて、まず4月29日に『たぶん悪魔が』を観たが、私の評価は星3つ。しかし、『湖のランスロ』は、鎧兜を身にまとった凛々しい中世の騎士たちが馬上にまたがって駆けるシーンを何度も予告編で観たので、これは必見！

◆ 中世の騎士道精神全盛期時代の「アーサー王伝説」は『キャメロット』（67年）等でお名だが、それに登場するという王妃グニエーヴル（ローラ・デューク・コンドミナス）と騎士ランスロ（リュック・シモン）との“不義の恋”はどれほど有名なの？ 寡聞にして私は全然知らなかったが・・・。

時は中世。ランスロやゴーヴァン（アンバール・バルザン）たち、アルテュス王の“円卓の騎士”たちは、「聖杯探し」の任務に失敗したうえ、多くの仲間の騎士を失ったため、失意の中で城に帰還していた。冒頭、そんな説明が字幕で表示されるが、その説明は私にはイマイチ、というより、基本的にチンプンカンプン・・・。

◆ロミオとジュリエットの、一目惚れから始まる悲恋の物語は誰でも知っているが、本作に見る円卓の騎士ランスロと王妃グニエーヴルとの“道ならぬ恋”（要するに不倫）は、その背景がサッパリわからないまま、2人のクソ難しい会話が展開していくから全然面白くない。

他方、本作のチラシには、「権力を手に入れようと企むモルドレッドは罪深きランスロを貶め、自分の仲間を増やそうと暗躍する。」と書かれているが、その権力争いの原因がサッパリわからないから、これも全然面白くない。本作は重々しい雰囲気の中でさまざまなストーリーが進んでいくが、そのすべてが私にはイマイチ、というより、基本的にチンプンカンプン・・・。

◆2021年10月16日に観た、リドリー・スコット監督の『最後の決闘裁判』（21年）（『シネマ50』117頁）は、「Based on the true story」の「中世の騎士もの」であるうえ、ある人妻の“強姦事件”を巡って“決闘裁判”に至る物語だから、私は興味深く鑑賞した。それと似たようなテーマ（？）の本作では、中盤のハイライトになるはずのランスロ VS モルドレッドの決闘に期待したが、これが完全に期待はずれ！

中世の騎士の鎧兜姿はカッコいいが、互いに槍を掲げた馬上の騎士が全速力でぶつかり合い、馬から落ちた後は剣を振るって死闘を見せるからこそ、その鎧兜姿に価値がある。したがって、映画ではそこでの迫力十分のアクションが不可欠だが、アレレ、本作のそれは一体ナニ？

本作は、全編を通じてそんな騎士たちの鎧兜姿が目立ち、音響的にも鉄と鉄がぶつかる音が目立っている。しかし、それってカッコだけ・・・？肝心のアクションは・・・？

◆ランスロは、なぜ兜で顔を隠したまま決闘に望んだの？決闘でモルドレッドに勝ったにもかかわらず、ランスロはなぜ失踪したの？ランスロ自身も負傷していたから、ひょっとして彼は今どこかで死亡しているの？

本作後半はそんな謎めいたストーリーが展開していくが、それは一体ナゼ？そして、そのそれぞれの結末は？そんな中、王妃グニエーヴルのランスロを思う気持ちが以前よりも強化されていくのが興味深いけど、肝心のランスロは・・・？そして、本作の結末は・・・？

本作は、「騎士道精神の崩壊と許されざる恋を描いたブレッソン悲願の企画」だそうだが、だから何なの？私にはイマイチ・・・。

2022（令和4）年5月19日記